

半七捕物帳

狐と僧

岡本綺堂

青空文庫

「これも狐の話ですよ。しかし、これはわたくしが自身に手がけた事件です」と、半七老人は笑った。

嘉永二年の秋である。江戸の谷中やなかの時光寺という古い寺で不思議の噂が伝えられた。それはその寺の住職の英善というのが、いつの間にか狐になっていたというのである。実途方もない奇怪な出来事ではあるが、寺の方からその届け出があつた以上、寺社奉行も単にばかばかしいといつて捨てて置くわけにも行かなかつた。

時光寺はあまり大きい寺ではないが、由緒のある寺で、その寺格も低くなかつた。住職の英善は今年四十一歳で、七年ほど前から先住のあとを受けついで、これまでに變つた噂もきこえなかつた。ほかに善了なつしよという二十一歳の納所と、英俊という十三歳の小坊主と、伴助という五十五歳の寺男と、あわせて三人がこの寺内に住んでいた。伴助は耳の遠い男であつたが、正直者として住職に可愛がられていた。

こうして何事もなく過ぎていくうちに、思いもよらない事件が出来^{しゅったい}して、檀家は勿論、世間の人々をもおどろかしたのである。事件の起る前夜、住職の英善は、根岸の伊賀屋という道具屋の仏事にまねかれて、小坊主の英俊を連れて出たが、四ツ（午後十時）少し前に英俊だけが帰つて来た。師匠は途中でこれからほかへ廻るから、おまえは先へ帰れといったので、小坊主はそのまま別れて来たのであった。

夜なかになつても住職は戻らないので、寺でも心配した。伴助は提灯を持って幾たびか途中まで迎いに出て行つたが、英善の姿はみえなかつた。こうして不安の一夜を送つた後、この寺から二町ほど距^{はな}れた無総寺という寺のまえの大きい溝^{どぶ}のなかに、英善によく似た者のすがたが発見された。それはあくる朝のことで、いつも早起きの無総寺の寺男が見つけたのであるが、溝にはまり込んで死んでいたのは、人間ではなかつた。それは法衣^{ころも}や袈裟^{けさ}をつけている狐であった。寺男はびつくりして、ほかの人々にも報告したので、たちまちこのあたりの大騒ぎとなつた。

袈裟や法衣をつけている者の正体はたしかに年経^ふる狐に相違なかつた。死体の傍には数珠^{ゆず}も落ちていた。小さい折本の観音経も落ちていた。履物はどこにも見えなかつたが、その袈裟と法衣と、数珠と経^{きょうもん}文と、それらの品々がことごとく時光寺の住職の持ち物に

符合するばかりか、その経文の折本のうちには時光寺と明らかに書いてあるので、誰もそれをうたがうことは出来なかった。殊にその本人の英善がゆうべから戻って来ないのであるから、諸人はいよいよこの奇怪な出来事を信ずるよりほかはなかった。唯ここに残された問題は、英善がゆうべこの狐にたぶらかされて、その衣類や持ち物を奪われたのか、或いはその以前から本人の正体はどこかへ消えてしまつて、狐が住職になり澄ましていたのかという事で、その疑問は容易に解決されなかつた。

無総寺の寺男の話によると、夜なかに門前で頻りに犬の吠える声を聴いたというのである。英善に化けた狐は犬の群れに追いつめられて、この溝のなかへはまり込んで死んだのであろうと彼は云つた。ほかの人々もそんなことであらうと思つた。

「なるほど、そういえば此の頃は、うちの御住持さまは大変に犬を嫌つていなすつた」と、時光寺の納所なっしょも云つた。

以前はそうでもなかつたが、この一、二カ月まえから住職の英善がひどく犬を嫌うようになつたことは、納所の善了も寺男の伴助も認めていた。これらの事実を綜合してかんがえると、人間の英善はこの夏の末頃から消えてなくなつて、狐の英善が住職になり代つていたらしい。伯藏主はくぞうすの狐や茂林寺もりんじの狸のむかし話なども思いあわされて、諸人も奇異の

感にうたれながら、とにもかくにも一カ寺の住職の身のうえにこういう椿事しゅつたいが出来来したのであるから、単に不思議がつてばかりはいられなかった。時光寺からは有りのままに届け出て、寺社奉行はその詮せんさく索さくに取りかかったのであった。

時光寺の納所も小坊主も寺男も、みな嚴重に吟味された。奇怪な死体をはじめて発見したという無総寺の寺男も勿論取り調べられた。しかも彼等の口から何の手がかりを聴き出すことも出来なかった。住職は近頃犬を嫌うようになったという以外には、時光寺の者共も別に思い当ることはないと申し立てた。もしや住職の死骸を発見することもあろうかと、時光寺の床下や物置や、庭の大木の根もとなどを掘り返してみたが、死骸はおろか、それかと思われのような骨一つすらも見いだされなかった。檀家おともの主なるものも調べられた。その当夜、自宅の仏事に時光寺の住職を招いたという根岸の伊賀屋嘉右衛門も吟味をうけたが、伊賀屋でも当夜の住職の挙動について別に怪しい点を認めなかったと答えた。

寺社奉行の方でもこの上に詮議のしようもなかった。時光寺の住職はゆくえ不明になつて、いつの間にか狐がその姿になりかわつていたというほかには、なんとも判断のくだしようにないので、その詮議はひと先ずこれで打ち切ることになった。

九月の末には陰くもつた日がつづいた。神田の半七は近所の葬とむらい式を見送つて、谷中やなかの或る寺まで行つた。ゆう七ツ（午後四時）過ぎに寺を出て、ほかの会葬者よりも一と足さきにごらごら帰つてくると、秋の空はいよいよ暗くなつた。寺の多い谷中のさびしい道には、木の葉が雨のように降つていた。まだ暮れ切らないのに、どこかの森のなかで狐の声がきこえた。半七はこのごろ世間の噂になつてゐる時光寺の一件をふと思ひ出した。かれは町奉行付きで、寺社奉行の方には直接の係り合ひはないのであるが、それでも自分の役目として、今度の奇怪な出来事に相当の注意を払つていた。

「無総寺というのはこの辺かしら」

そう思いながら歩いてくると、ある寺の土塀に沿うた大きい溝のふちに、ひとりの少年が腹這いになつてゐるのを見た。少年は十三四歳の小坊主で、土のうえに俯伏うつぶしながら何か溝のなかの物を拾おうとしてゐるらしかつた。半七はそのまま通り過ぎようとして、なにごなくその寺の門を見あげると、門の額がくに無総寺と記しるしてあつたので、かれは俄かに立ちどまつた。時光寺の住職に化けていた狐の死骸は、ここの大溝から発見されたというの

である。その溝のふちに小坊主が腹這いになって何か探しているらしいのを、半七は見す
ごすことが出来なかった。かれは立ち寄つて声をかけた。

「お小僧さん。なにか落したのかえ」

それが耳にもはいらないらしく、小坊主は熱心になにか拾おうとしていた。しかしまだ
十三四の子供の手では溝の底までとどかないので、かれは思い切つて下駄をぬいで、石垣
を伝つて降りようとするらしかった。半七は再び声をかけた。

「もし、もし、お小僧さん。なにを取ろうとするんだ。なにか落したのなら、わたしが取
つてあげる」

小坊主は初めて振りかえつたが、返事もしないで黙っていた。半七はかがんで溝をのぞ
くと、底はさのみ深くもなかった。苔の多い石垣のあいだから幾株の芒や秋草が水の上に
垂れかかつて、岸の近いところには、湿れた泥があらわれていた。それを見まわしている
うちに、ある物が半七の眼についた。

「おまえさん。あれを取ろうというのかえ」と、半七は溝のなかを指さして訊いた。

小坊主は黙つてうなずいた。こんなことには馴れている半七は、草履の片足を石垣のな
かほどに踏みかけて、片手に芒の根をつかみながら、からだを落すようにして岸に近い泥

のなかへ片手を突っ込んだ。彼がやがて掴み出したのは小さい仏の像であった。仏は二寸に足りないもので、なにか黒ずんだ金物で作られているらしく、小さい割合にはなかなか目方があつた。

「この仏さまをお前さんは知っているのかえ」と、半七は泥だらけになっている仏像を小坊主の眼のさきへ突きつけると、かれはそれをうやうやしく受け取って、自分の法衣ころもの袖のうえに乗せた。

「おまえさんのお寺はどこだね」と、半七はまた訊きいた。

「時光寺でございます」

「むむ。時光寺か」

半七はあらためてその小坊主の顔をみた。かれは色の白い、眼の大きい、見るからに利口りくそうな少年であつた。

「じゃあ、このあいだ和尚おしょうさんの一件のあつたお寺だな。そこで、その仏さまはお前さんが落したのかえ」

「今ここで見つけたのです」

「じゃあ、おまえさんのじゃあ無いんだね」

小坊主はその返答に躊躇しているようであったが、結局、これは自分の寺のものであるらしいと云った。

「お寺の物がどうしてこの溝のなかに落ちていたんだろう」と、半七はかれの顔色をうかがいながら訊いたが、小坊主はやはり何か躊躇しているらしく、口唇をむすんだままで少しうつむいていた。

この小さい仏像について何かの秘密があるらしいと睨んだので、半七はたたみかけて訊いた。

「和尚さんはここの溝のなかに死んでいたんだそうだね」

「はい」

「そこにその仏像が落ちていて、しかもそれがお寺の物だという。そうすると、和尚さんの落ちた時に、それも一緒に落したのかね」

「そうかも知れません」

「隠しちやいけねえ。正直に云って貰いたい」と、半七はすこし詞をあらためた。「実はわたしは町方の御用聞きだ。寺社とお係りは違うけれど、こういうところへ来あわせては、調べるだけのことは調べて置かなければならねえ。その晩、和尚さんがその仏さまを

持つて出たのかえ」

相手の身分を聴くと共に、小坊主の態度は俄かに変わった。かれは今までとは打つて變つて、半七の問いに對して、何でもはきはきと答えた。

かれは時光寺の英俊であった。師匠の英善がゆくえ不明になった晩、かれは師匠の供をして根岸の伊賀屋へ行った。読経どきよがすんで、一緒に連れ立って帰る途中、師匠はほかへ路寄りすると云つて別れたまま再び戻つて来ない。そうして、そのあくる朝、師匠の袈裟法衣をつけた狐の死骸がこの溝の中に発見されたのである。それがどう考えても判らないので、かれは絶えずそれを考えつめていると、今日この溝のふちを通るときに、測らずも泥のなかに何か薄黒く光るようなものを見つけたのであった。仏像はおそらく師匠の袂たもとかふところに入れてあつて、ここへ転げ込むときに水のなかへ滑り落ちたのを誰も見つけ出さなかつたのであろう。毎日陰くもつてはいるが、この頃すこしも雨がなかったので、溝の水もだんだんに乾いて、泥に埋められていた仏像が自然にその形をあらわしたのであろう。自分にもよく判らないが、これは寺の秘仏として大切に保管されているものであるらしい。なんでも遠い昔に異朝から渡来したもので、その胎内には更に小さい黄金仏が孕はらませせてあると云いつたえられている。自分は九つの年から寺に入つて、足かけ五年のあいだに三度し

か拝んだことはないが、これはどうもその仏像であるらしいと彼は説明した。

それほど大切の秘仏を住職がなぜむやみに持ち出したか、それが半七にも判らなかつた。英俊にも判らなかつた。

「しかしこれを見ると、狐がお住持に化けていたなどというのは嘘です」と、英俊は云つた。「わたしも最初から疑わしいと思つていましたが、もし狐ならばこういうものを持ち出す筈がありません。狐や狸は尊い仏を恐れる筈です」

それは如何にも仏弟子らしい解釈であつた。半七は又それと違つた解釈で、時光寺の住職の正体が狐でないことを確かめた。

「お住持は……お師匠さまは……」と、英俊は俄かに泣き出した。

「おい。どうした、どうした」と、半七はかれの肩に手をかけた。

英俊はその肩をゆすぶつて泣きつづけた。かれの涙は法衣の袖にほろほろとこぼれて、大切にさげていた異国の仏像の御首みくしにも流れ落ちた。

「泣くことはねえ。おれがその仇を取つてやる」と、半七は云つた。「その代り、おまえの知っているだけのことは何でも話してくれねえじゃあいけねえ。といつて、いつまでもここで立ち話も出来めえ。あしたの朝、わたしの家まで来てくれ。神田の三河町で、半七

と聞けばすぐ判る」

三

あくる朝、英俊は約束通りに半七をたずねて来た。そうして、師匠の英善の身のうえに就いて自分の知っているだけのことを詳しく話して帰った。帰る時に、半七はかれに何事かを教えてやった。それからすぐに身支度をして、半七も寺社奉行の役宅へ出て行った。

寺社方の許可を得て、かれは何かの活動に取りかかるらしく、役宅から帰ると更に子分の松吉と亀八を呼びよせた。

「ひよつとすると草鞋わらじを穿はくかも知れねえ。そのつもりで支度をして置け」
 午ひるすぎになつて英俊がふたたび来た。

「親分さん。安蔵寺の三人はきのうの朝、一挺の駕籠を吊らせて帰ったそうです」

「駕籠は一挺か」と、半七は少し考えた。「そこで、どうだろう。その頭かしらの坊主は……」
 「昌典という人はまだ残っているらしいのです」

「よし。じゃあ、すぐに出かけよう。一日の違いなら何とかなるだろう。もう一日早けれ

ば訳はなかったのだが、どうも仕方がねえ」

半七は二人の子分をつれて、俄かに甲州街道の方角へ旅立ちすることになった。かれは見識り人として英俊をも連れて行かなければならなかったが、まだ十三の少年が足の早い彼等と共にあるくことは出来そうもないのと、彼等もゆく手を急ぐのとで、四挺の駕籠を雇つて神田を出たのは其の日の八ツ（午後二時）を過ぎた頃であつた。

先をいそぐ四人は御用の旅という触れ込みで、むやみに駕籠を急がせた。新宿で駕籠をかえて其の晩のうちに府中の宿^{しゆく}まで乗りつけた。あくる朝七ツ（午前四時）ごろに宿屋を立て、日野、八王子、駒木野、小仏、小原、与瀬、吉野、関野、上の原、鶴川、野田尻、犬目、下鳥沢、鳥沢の宿々あわせて十六里あまりを駕籠で急がせた。自分たちはともかくも、旅馴れない上に年のゆかない英俊がもし途中で弱るようなことがあつてはならないと、立^{たて}場々々へ着くたびに半七はかれに気つけ薬を飲ませて介抱したが、英俊はちつとも弱らなかつた。彼は一刻も早くお師匠さまを救つてくれと、そればかりを繰り返していた。

「お小僧さん、なかなか強いな」と、子分たちも励ますように云つた。

鳥沢の宿へはいつたのは夜の五ツ頃で、夕方から細かい雨がしとしと降り出していた。今夜のうちに次の宿の猿橋まで乗り込みたいと思つたが、あいにくに雨が降ると、駕籠

屋も疲れ切っているのと、半七はここで今日の旅を終ることにして、駕籠のなかから声をかけた。

「おい、若い衆さん。この宿しゆくでどこかい家うちへつけてくれ」

「はい、はい」

雨はだんだん強くなつて来たのと、泊まりの時刻をもう過ぎたのと、暗い宿しゆくの旅籠屋はたごやでは大戸をおろしているのもあった。四挺の駕籠が宿の中まで来かかると、左側の小さい旅籠屋のまえに一挺の駕籠のおろされているのが眼についたので、半七は自分の駕籠の垂た簾れをあげて透かして視ると、その駕籠は今この旅籠屋に乗りつけたらしく、駕籠のそばには二人の男が立っていた。ひとりは内にはいつて店の番頭となにか掛け合っているらしい。その三人がいずれも旅僧であることを覚った時、半七はすぐに自分の駕籠を停めさせた。その合図を聞いて子分の松吉と亀八もつづいて駕籠を出た。英俊も出た。四人は雨のなかを滑りながら駈け出して、ばらばらとその旅籠屋の店さきへはいった。

駕籠の脇に立っている旅僧の一人は、英俊の顔をみて俄かにうろたえたらしく、あわててほかの僧を見かえる間に、松吉と亀八はもうそのうしろを取りまくように迫っていた。

「失礼でございますが、このお駕籠にはどなたがお乗りです」と、半七は丁寧きに訊いた。

ふたりの僧は黙っていた。

「では、御免を蒙こうむって、ちよつとのぞかせて頂きます」

再び丁寧なことわつて、半七は桐油紙とうゆを着せてある駕籠の垂簾たれを少しまくりあげると、中には白い着物を着ている僧が乗っていた。英俊は泣き声をあげてその前にひざまずいた。

「お師匠さま」

僧は眼を動かすばかりで、口を利かなかつた。彼はいつまでも無言であつた。英俊は彼の袖にすがつて再び呼んだ。

「お師匠さま」

無言の僧は時光寺の住職英善であつた。かれが無言であるのは、声を出すことの出来ないような一種の薬を飲まされていたのであつた。

「もうここまで来れば、あとは詳しく云うまでもありますまい」と、半七老人は云つた。

「ところで、なぜこんな事件が起つたかというと、この宗旨の本山の方に何か面倒な事件があつて、こんにちの詞ことばでいえば、本山擁護派と本山反対派の二派にわかれて暗闘を始めていたというわけなんです。それがだんだんに激しくなつて、本山の方からも幾人かの坊

主がしゅつぷ出府して、江戸の末寺を説き伏せようとする。末寺の方では思い思いに党を組んで騒ぎ立てる。その中でも時光寺の住職は有力な反対派の一人、まかり間違えば寺社奉行へまで持ち出して裁決を仰ごうという意気込みなので、本山派の方で持て余して、なんとかしてこの住職をなき者にしよう……。と、出家同士のことでですから、まさか殺すわけにも行かないので、この住職を本山へ連れて行って、当分押し込めて置こうということになったのです。そこで、住職がいつの晩には根岸の檀家へ出かけて行くというのを知って、帰る途中を待ち受けて、腕づくで取っつかまえて下谷坂本の安蔵寺という本山派の寺へ連れ込んでしまったのです。そうして、口を利くことの出来ないように、毒薬を飲ませたのだそうです」

「そうなる、例の狐はその身代りみがわなんです」

「そうです、そうです」と、老人はうなずいた。「一カ寺の住職がただ消えてなくなったというのでは、詮議がむずかしかろうという懸念けねんから、住職の袈裟けさや法衣ころもはぎ取って、それを狐に着せて……。いや、今からかんがえると子供だましのようですが、それでもよっぽど知恵を絞ったのでしよう」

「ところで、大切な仏像というのはどうしたんです。やはりその住職が持っていたんです

か」

「いつの代でも、なにかの問題で騒ぎ立てれば相当の運動費がいります。時光寺は本来小さい寺である上に、住職が本山反対運動に奔^{ほんそう}走しているのです、その内証は余程苦しい。まして寺社奉行へでも持ち出すとすれば、また相当の費用もかかる。それらの運動費を調達するために、住職は大切の秘仏をそつと持ち出して、それを質^{かた}に伊賀屋から幾らか借り出そうとして、仏事の晩にそれを厨子^{ずし}に納めて持ち込んだのですが、ほかに大勢の人がいたので云い出す機^{わり}がなくなつて一旦は帰つたのです。しかしどうしても金の入用に迫つているので、途中から小坊主を帰して、自分ひとりで伊賀屋へまた引返す途中、運悪く本山派の罫^{わな}にかかつて、持つていた厨子は無論に取りあげられてしまったのですが、その時に住職が手早く仏像だけをぬき出して自分の袂^{たもと}へ隠したのを、相手の者は気がつかかなかつたと見えます」

「その落^{らく}着^{ちやく}はどうなりました」

「事件もこうなると大問題です」と、老人は眉をしかめて云つた。「無論に寺社方の裁判になりました。本山から出府している坊主は十一人ありましたが、ほかの寺に宿を取つていた七人はこの事件に関係がないというので免^{ゆる}されました。安蔵寺に泊まっていた四人、

その三人は住職の駕籠について行き、一人は江戸に残っていましたが、いずれも召し捕つて入牢じゅうろう申し付けられ、その中で二人は牢死、二人は遠島になりました。時光寺の納所なっしょの善了も本山派に内通していたという疑いをうけて、寺を逐おい出されたそうです。この事件も手をひろげたら随分大きくなるでしょうが、本山の方へは一切いっさい手を着けずに、江戸だけで片付けてしまいましたから、前にいった四人のほかには罪人も出ませんでした。時光寺の住職はその後に療治をして、すこしは声が出るようになったので、やはり元の寺に勤めていましたが、上野の戦争のときに彰義隊の落武者おちむしやをかくまったというので、寺にも居にくくなつて、京都の方へ行つたそうです。英俊は利口な小僧で、その時に師匠と一緒に一緒に行つて、今では京都の大きい寺の住職になつていと聞きました。なにしろこの探索では小坊主がおおだてもの大立物で、その口から本山派と反対派のもんちやく撰せん著しやくを聴いたので、わたくしもそれから初めて探索の筋道をたてたようなわけですからね。今でも時々あるようですが、むかしも寺々の撰著はたびたびで、寺社奉行を手古摺てこずらせたものですよ」

併しそこにまだ一つの疑問が残されていた。それは時光寺の住職がかの事件の起る以前からと俄かに犬を嫌うようになったということである。私はそれを聞きただすと、老人は笑つて答えた。

「それはなんにも係り合ひのないことなんです。住職が犬を嫌うようになったというので、おそらく狐が化けていたのだらうなどという疑いも起つて来たんですが、だんだん調べてみると斯ういうわけでした。住職は出家のことで、ふだんから畜類を可愛がつていたんですが、本山反対の運動を起してから、こんにちの詞ことばでいえば神経が興奮したとでもいうのでしよう。なんだか苛いらいら々らしたような気分になって、今まで可愛がつていた犬などにも眼をくれず、犬の方から尻尾しつぽをふつて近寄つても、怖い顔をして追つ払うという風になった。そこへ例の一件が出しゅつ来たいしたものですから、それが又何だか仔細ありげに云い触らされるようになったのです。一体この事件にかぎらず、わたくし共の方ではよくこんな事いろいろ思い違ひや見込み違ひをすることがあります。無事の時ならばなんでもないことが、大おお仰おぎょうに仔細ありげに考えられますから、よつほど注意しないといけません。探索という上から見れば、髪の毛一本でも決して見逃がしてはなりません、所詮しよせんは大体のうえに眼をつけて、それから細かいところへ踏ふみ込んで行かないと、前にも云つたような、飛んだ見込み違ひで横道へそれてしまうことがありますよ」

青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（二）」 光文社文庫、光文社

1986（昭和61）年3月20日初版1刷発行

入力：tatsuki

校正：山本奈津恵

1999年9月22日公開

2004年2月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

半七捕物帳

狐と僧

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>